

自ら学び 自ら鍛える  
**Team 北中**

令和7年度 学校報 第6号 令和7年9月1日

発行責任者 校長 吉田 知己  
担当者 教頭 後藤 正英

《キーワード》 『集中と継続』

## 「自ら学び、自ら鍛える」ことで、どんな力を身に付けるのか

校長 吉田 知己

1898年の統計開始以降、最も暑い夏として話題になりました。1933年に観測された国内最高気温40.8℃が、2007年に多治見市で40.9℃を観測し、記録更新とともに日本一暑い町として報道されたことをいまだに覚えています。近年、最高気温が40℃を超えてもそれほど驚くこともなく、8月5日には群馬県で最高気温41.8℃を記録したそうです。



夏休みに入ってから県下に熱中症警戒アラートが発表されるなど、屋外はもちろん屋内での活動にも影響を与え、夏休みが明けてもまだまだ残暑が厳しいようです。これら気候の変化について、その背景に「地球温暖化」があると言われていています(気象については2年生の理科で、「地球温暖化」という言葉は3年生の教科書に)。温室効果ガスの1つである二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)の排出量の増大が温暖化の原因だと言われており、これをどう抑えるかは大きな課題です。

そんな酷暑のなか、8月22日に岐阜県内各市の教育長さんが瑞浪北中学校の視察に訪れました。文部科学省の「スーパーエコスクール実証事業」の指定を受けて建設された瑞浪北中学校。いくつもの省エネ、創エネのための仕掛けが施されています。その仕掛けについて学習した3年生の代表生徒が、20名の教育長さんを前に説明をしました。いずれの説明も相手を意識して工夫された内容で、実演や動画を交えてわかりやすく説明しました。準備時間もほとんどない夏休み中の取り組みでしたが、教育長さんにも大好評で、校舎だけではなく、そこで学ぶ生徒の素敵な姿を評価していただきました。

これだけ環境に配慮された北中であっても、夏の冷房、冬の暖房は欠かせません。より快適な生活を求めるのであれば、どこかでエネルギーを消費しなければならないし、省エネルギーを進めるためには、どこかで我慢しなければなりません。学校では「気温が何℃以上の時はエアコンを入れてよい。何℃以下になったらストーブをつけてよい」のようなルールを設定することが一般的ですが、教育長さんを前に発表する生徒の姿を見て、生徒自身が現状をモニターし、省エネも考慮しながら自分たちの判断で快適な環境を作り出すことが、瑞浪北中学校なら十分可能だと感じました。

毎年のように国内の最高気温が書き換えられるような現代。5年後、10年後の夏はどうなっているのだろうか、ちょっと心配になります。また生成AIが急速に発展する現代。10年、20年後の社会を生き抜くために、今、本当に身に付けなければならない力は何なのか。知識を増やすだけでなく、考えたり、検討したり、判断したりする力や、それを実行する行動力こそ求められています。学校の教育目標「自ら学び 自ら鍛える」内容は、必ずしも授業内容だけではないはず。

この夏休み中も各種大会やコンクール、ボランティア活動などを頑張った人も多くいました。もちろん自身の学習でも。夏休み明けの集会で、山路生徒会長は「全校生徒が北中の誇りを語れること」をめざし、「小さなことでも手を抜かない。係の活動に責任をもち、最後までやりきる」ことを大切にしてほしいと話しました。これからの学校生活で、1人の生徒として、それぞれの学級・学年として、何を充実させていこうか。

